

ジョージ・A・バーミンガムの短篇小说 「命がけの愛」

八 幡 雅 彦

George A. Birmingham's Short Story, "A Soul for a Life"

Masahiko YAHATA

【要 旨】

本稿は、ジョージ・A・バーミンガム（1865-1950）の短篇小说「命がけの愛」の翻訳・考察を通してこの作品の意義と価値を示す。バーミンガムは第6作目の小説『スペインの黄金』（*Spanish Gold*, 1908）でユーモア小説に転向し、その後もアイルランドのナショナリストとユニオニストの対立をユーモラスに描き続け、人間同士の融和のためには何事にもジョークを見出そうとするユーモアの精神が必要だという信念を訴え続けてきた。この信念は、人間愛と寛容の精神に基づく彼の深いキリスト教信仰から生み出されたものである。しかしこの「命がけの愛」は例外的に深刻な小説で、1組の男女の恋愛とその破綻を描き、今日も続くナショナリストとユニオニストの対立の根深さをえぐり出している。この小説は、バーミンガムが深刻な小説の書き手としても優れていることを示している。同時に彼の深刻な小説が、ユーモア小説同様に、普遍的な意義と価値を備えていることを示している。

【キーワード】

アイルランド 短篇小说 ナショナリズム ユニオニズム 恋愛

はじめに

ジョージ・A・バーミンガム（1865-1950）の初期の小説は、アイルランドのイギリスからの独立を訴えるナショナリストと、イギリス残留を主張するユニオニストの対立を深刻に描いた。しかし第6作目の『スペインの黄金』（*Spanish Gold*, 1908）でユーモア小説に転向し、その後もナショナリストとユニオニストの対立をユーモラスに描き続け、人間同士の融和

のためには何事にもジョークを見出そうとするユーモアの精神が必要であることを訴え続けた。この信念は、人間愛と寛容の精神に基づく彼の深いキリスト教信仰から生み出されたものであった。彼は、1888年にダブリン大学トリニティ校神学部を卒業して、ウィックロウ州デルガニーにアイルランド国教会副司祭として赴任して以来、1950年にロンドン・サウスケンジントンでイギリス国教会司教として84年の生涯を終えるまで、約60年間を聖職者として過ごし

た。

短篇小説に関しても、バーミンガムは『ウィッティ医師の冒険』(*The Adventures of Dr. Whitty*, 1913)を皮切りに6冊の短編小説集を出しており、そのほとんどすべてがユーモア小説で、今までに本稿著者はバーミンガムのユーモアの真髄を伝える5つの作品を『別府大学短期大学部紀要』及び『大分県アイルランド研究協会会報』のうちで翻訳紹介してきた。これらについては、筆者が作成したバーミンガムに関するホームページ (<http://geo-birmin.com>)を参照されたい。

しかし、『気前の良い夫人』(*Lady Bountiful*, 1921)に収められた「命がけの愛」(“A Soul for a Life”)だけは、バーミンガムの初期の小説を彷彿させる深刻な作品である。舞台は、第一次世界大戦直後のアイルランドの田舎町である。バーミンガムは1918年から1920年までキルデア州カーナルウェイで教区司祭を務めており、この時の体験に基づいて書かれた作品と思われる。この作品を翻訳したうえで、考察を試みる。

翻訳「命がけの愛」

デニス・ライアンとメアリー・ドレナンは森の角の、町まで1マイルの直線道路の端のところにふたり一緒に立っていた。彼らは若かった。少年少女のようなあどけなさだったが、まぎれもない恋人同士で、恋人同士にふさわしくふたり一緒に立っていた。彼は左の腕で彼女を抱き、右手は彼女の手を握っていた。彼女は頭を彼の肩に置いていた。

「メアリー」デニスはささやいた。「どうしてぼくたちはすぐに結婚できないんだ」

彼女は彼の肩から頭を上げ、優しく彼の目を見た。

「お父さんとお母さんさえいなければ私たち結婚できるかもしれないわ」彼女は言った。「でもデニス、ふたりともあなたのことが嫌いな。だから絶対結婚を認めてくれないの」

恋人同士の間ではお金の問題が起こることが

ある。しかしメアリーとデニスを引き離しているのはお金ではなく、そしてお金がないためでもなかった。メアリーは、アイルランドでは裕福とみなされるだけの富を持った農夫の娘だった。デニスは弁護士事務所の職員で、給料は安かった。しかし彼だったらもっと稼ぐことも可能だったかもしれない。彼女は喜んで何もかも諦めてもかまわなかった。そしてこのような場合、親の反対を乗り越えることはあながち不可能ではない。しかし彼らふたりの間にはもっと深刻な別のものがあつた。デニスは革命的愛国主義者だった。メアリー・ドレナンの両親は彼とは反対の忠誠を誓っていた。彼らはデニスが愛するものを嫌っていた。これらふたつの別々の忠誠は、アメリカの南北戦争の時の南と北のように、お互い強くて相容れないものだった。

「君のお父さんとお母さんが何だっていうんだ」彼は言った。「メアリー、君がぼくを愛しているのならそれで十分じゃないか」

彼女は再び顔を彼の肩に隠した。彼女は、彼が聞き取れるか聞き取れないかの小声で答えた。

「デニス、私は心からあなたを愛しているわ！ あなたに命をあげてもいいくらいに愛しているわ！」

ひとりの男が足早に道路を歩いてやって来た。彼はドレナンの農場のゲートを通り過ぎ、恋人同士が立っている森の端に近づいて来た。デニスはメアリーの腰から腕を離し、ふたりは少し離れた。

男はふたりのところにやって来ると立ち止まった。

「よお、デニス！」男は言った。「こんばんは、お嬢さん！」

その挨拶には十分親しみがこもっていたが、男はメアリーにきつい視線を送った。

「いいかデニス、今夜の集会を忘れるなよ！」男は言った。「9時にフラハティーの家の納屋だ。覚えておけ！ 重要な集会だ。みんな、おまえを待っているからな！」

言葉には親しみがこもっていたが、その話し方には脅しが感じられた。答えを待つこともな

く、男は足早に町の方に向かって歩いて行った。メアリーは両手を伸ばし、彼女の恋人の腕にしっかりしがみついた。彼女は彼を見上げた。彼女の顔には恐怖が浮かんでいた。

「何なの、デニス」彼女は尋ねた。「マイケル・ムーニハンは一体あなたに何を望んでいるの」

今日、アイルランドの女性たちは恐怖に怯える理由がある。彼女たちの恋人たち、夫たち、息子たちは秘密結社のメンバーかもしれない。彼らは気が狂った男たちの敵意を招くかもしれない。どんな女性も愛する男性の命の安全が確信できない。

「何の集会なの、デニス」彼女は再びささやいた。「教えて、デニス！」

「今夜、ダブリンからひとりの紳士がやって来て、ぼくたちに話をしてくれるんだ」彼は言った。「それでクラブのメンバーは出席して、彼の話聴かなくちゃならないんだ。たぶん彼の話は、アイルランド語を習えとか、イギリス軍に志願するなといったことだろう」

「それだけなの、デニス。あなた本当にそれだけだと思っているの。あの人、あなたに何か他のことをやらせるつもりじゃないの」

アイルランドのこのあたりは静かな場所だった。しかし他のどの地方でも、家が襲われ、警察署が攻撃され、人が撃たれ、傷つけられ、殺されていた。そしてその後逮捕され、投獄され、すぐさま野蛮な報復が行われていた。メアリーはダブリンからやって来る男が何を望んでいるのか怖かった。デニスは彼女の方を向いた。彼もまた恐怖に怯えているのが彼女には分かった。

「メアリー、メアリー！」彼は言った。「何が起ころうとも君と君の家族に危害はないからね！」

彼女は彼の腕から両手を放し、ため息をついて彼から離れた。

「デニス、私は帰らなくちゃならないわ。お母さんが私を探しているの。もし私がここであなたと話していたことを知られたら、お母さんに何を言われるか分からないわ」

ドレナン夫人は彼女の娘がどこにいたか見抜いていた。彼女は、メアリーが農場の台所にいった時、本心をぶちまけた。

「私は、あなたが2度とデニス・ライアンと話すことも出歩くことも許さないからね！あなたのお父さんも許さないからね。彼が何者か、彼の友人が何者か、誰も知っているのよ。あの連中はこの上なくひどいことをやるのだから。私の娘があのような連中と交わることは一切許さないからね！」

「お母さん、デニスは何も悪いことはしていないわ」メアリーは言った。「それに彼がもしアイルランドは独立共和国になるべきだと思うのだとしたら、彼の意見にも、お母さんや私やお父さんの意見と同じように当然の権利があるんじゃない」

「相手が警官であれ誰であれ、罪もない人々を撃ったり殺したりする権利は誰にもないわよ。それがデニス・ライアンと彼らの一味が、昼も夜も、アイルランド中でやっていることなのよ。もしあの連中がまだここでやっていないとしたら、もうじきやることになるわ。私はあの連中のことを悪党と呼ぶわ。あの連中は、1人残らず1日も早く絞首刑になった方がいいわ！」

.....

その日の夜、フラハティーの家の納屋でダブリンからやって来た紳士が20人から30人の若者の聴衆に向かって語っていた。彼は情熱と確信をもって語った。彼は、ずっと昔の過去からアイルランドがイギリスのしわざで苦しんできた不正に関して、幾千回と繰り返されてきた話をここでも語った。彼は最近の出来事を語った。裁判もなしに、はっきりした罪状もなしに、逮捕され投獄された男たちについて語った。当然の権利に対する許しがたい背反行為について語った。彼は国の自由という偉大な野望について、そして独立共和国としてのアイルランドについて語った。彼が語りかけている男たちはすべてが若者たちで、目を輝かせ、歯を食いしばり、感極まって頬を濡らしながら聴いていた。彼らは、彼が言葉を発するたびに怒号と罵りの

声を上げた。彼はアイルランドの他の地の男たちがどうしているか話し続けた。彼は、彼らのことを「アイルランド共和国の兵士たち」と呼んだ。彼らはイギリスの軍隊を攻撃した。警察署を襲撃した。彼らは、見つかる限りの武器と弾薬を奪った。アイルランドのどこでも男たちはそのような偉大な行為をしていると語った。

「しかし君たちはここで何をやってきたのだ」彼は尋ねた。「そして君たちはなにをするつもりなのだ」

マイケル・ムーニハンが次に口を開いた。彼は、彼の周囲にいる男たちと彼の属している組織のことを恥に思うと語った。

「俺たちだけがアイルランドで唯一何もしていないとは、侮辱だ」彼は言った。「戦いの日が来たら俺たちは戦えるか。戦えない。俺たちはどんな武器を持っているというのだ。拳銃2丁だけだ。拳銃2丁、それがすべてだ。長銃1丁もないのだぞ。おまえたちも俺も良く知っての通り、アイルランドの敵どもはいくらでも長銃を持っている。このあたりで、長銃を、しかも上等な長銃を持っている家を俺は20軒は知っている。おまえたちはもっと数多くの家を知っているはずだ。なぜ俺たちはそれらをかっぱらうことができないんだ。俺たちは臆病者か」

彼の周囲の男たちは、自分たちは臆病者などではないと怒って叫んだ。デニス・ライアンは興奮し、強く心を動かされ、他の男たちと一緒に叫んだ。彼は、彼と残りの者たち全員に許し難い侮辱が加えられた思いだった。

「今夜、やってやろうじゃないか」ムーニハンは言った。「俺たちが持っていて当然なのに、俺たちの敵が持っているライフル銃をかっぱらってやろうじゃないか。今夜出かけることに賛成の者は全員挙手しろ」

一瞬の沈黙があった。出席している男たちは誰も暴力を行ったこともなければ、人の命を脅かしたことも、公然とあからさまに法律違反をしたこともなかった。ダブリンからやって来た同志は、ムーニハンの近くに立って、男たちの顔を見渡した。彼の口元には、冷やかかで、軽蔑的な笑いが浮かんでいた。

「たぶん」彼は言った。「君たちはそんなことできないだろう。たぶん君たちは、私が君たちと一緒にいることを警察に通報しに行くだろう。彼らはその通報を喜ぶだろう。きっと君たちは報酬を得るだろう。どちらにせよ君たちは安全だ」

彼の侮辱に心を突き刺され、若者たちは次から次へと手を上げた。デニス・ライアンは、拳げる時に手が震えたが、挙手した。

「そうか、全員賛成だな」ムーニハンは言った。「それでは今夜決行だ。どの家を最初にやるか」

次々と名前が挙がった。男たちは彼らが住んでいる地域を良く知っており、武器のある家を知っていた。多くの家に猟銃があり、何軒かの家に拳銃が、2,3軒の家にライフル銃があった。

「ドレナンの家に軍用銃がある」ムーニハンは言った。「あいつの甥がフランスでイギリス軍に加わって戦っていた時のものだ。それに二連拳銃もある」

ドレナンは俺たちの同志ではない」ひとりの男が言った。「あいつはいつもアイルランドの敵だった」

「ドレナンは牛を連れてバリラダリーの市に出かけている」もうひとりの男が言った。

「家にはあいつの女房と娘しかない。あの子どもが俺たちを邪魔することはできないだろう」

ムーニハンは10人の志願者を募った。デニス・ライアン以外、部屋にいるすべての男たちがムーニハンの周りに集まり、行くことを申し出た。

「8人で十分だ」ムーニハンは言った。「2人が道で見張りをして、2人が女たちを黙らせて、4人が家の中の武器を捜す」

彼は話しながら周囲を見回した。彼の目はいぶかしげに、ひとりだけ他の者たちから離れて立っているデニス・ライアンの上に止まった。秘密結社の中では、そして革命主義者の間では、情熱が欠けているように見える者は疑いをかけられる。

「デニス・ライアン、おまえは俺たちと一緒に

に来るつもりか」ムーニハンは尋ねた。

部屋の中に一瞬の沈黙が訪れた。すべての目がデニスに釘付けになった。部屋の中には、彼とメアリー・ドレナンの仲を知らない者はいなかった。デニスの忠誠心に疑惑を感じていない者はいなかった。誰もが、自分の身の安全、たぶん自分の命は、同志たちへの完全な忠誠にかかっていることを知っていた。デニスは突然、拒否したい気持ちになった。彼は、周囲の顔の中に、恐怖ゆえの無慈悲な残酷さを見た。しかし彼は何も言わなかった。沈黙を破ったのはダブリンから来た同志だった。彼もまた状況を理解したようだった。彼は、とにかく、このひとりの男は何らかの理由で襲撃に参加したがっていいないことを感じ取った。彼はデニスを指さした。

「その男」彼は言った。「行くのだ。そしておまえが先頭に立ってやるのだ！」

紛れもなくこのようにして彼らは裏切り者を見つけ出すのだった。

「喜んでそういたします」デニスは言った。

「躊躇するつもりはございません」

ムーニハンはそのポケットから2丁の拳銃を出した。1丁をデニスに手渡した。

「おまえは母親の頭にその拳銃を突きつけておとなしくさせろ」彼は言った。「俺たちが家に入ったら、あの女に手を上げさせる。もしあの女が抵抗したらおまえが撃つのだ。しかし撃つ必要はないだろう。あの女はおとなしく立っているだけだ！」

デニスは拳銃を受け取るのを拒否して、後ずさった。

「ムーニハン、それはおまえがやってくれ」彼は言った。「そんなことをする必要があるのなら！」

「俺は、俺自身がやれないことをおまえにしろというつもりはない。俺はもう1丁の拳銃を使って、娘の方を黙らせる！」

「し、しかし」デニスは口ごもりながら言った。「俺は今まで一度も拳銃を持ったことがない。俺は、俺は恐ろしい！」

彼は文字通り真実を語った。彼はいかなる種

類の火器を扱ったこともなかった。経験がない男が手に持つ拳銃に勝る危険な武器はない。しかしムーニハンの目は彼に釘付けで、その上、他の男たちの不安げな、威嚇的な顔に取り囲まれ、彼は拳銃を取った。

1時間後、8人の男たちはドレナンの家まで静かに歩いて行った。彼らは黒い覆面をかぶっていた。彼らの服装と姿恰好は、両腕、両足に乾草の束を巻き付け、粗野だったが十分な変装をしていた。彼らのうち2人が拳銃を持っていた。幹線道路からその農家へと続くでこぼこ道のゲートのところで彼らは立ち止まった。小声で命令が下された。2人が離れ、道に見張り役として立った。6人が木陰の中を家に向かって進んだ。窓のうちのひとつが明かりで照らされていた。ムーニハンがドアをノックした。応答はなかった。彼はもう一度ノックした。明かりが、照らしていた窓から動いて消えた。もう一度ムーニハンがノックした。女性の声が聞こえた。

「こんな夜遅くに誰なの」

「アイルランド共和国のためにドアを開ける！」ムーニハンが言った。「開ける。でないとドアを叩き壊すぞ！」

「壊したければ、壊したらいいわ！」口を開いたのはドレナン夫人だった。「しかし私は泥棒や人殺しのためにドアを開けるつもりなどないからね！」

アイルランドの農家のドアは貧弱で、襲撃に耐えるにはお粗末な作りだ。ムーニハンが体をぶつけるといとも簡単に開いた。彼は手に拳銃を持って台所に踏み込んだ。デニス・ライアンは彼のそばにいた。彼の後ろから別の4人の男が押し入って来た。暖炉の残り火の前にドレナン夫人と彼女の娘がいた。メアリーは手にろうそくを握りしめて、恐れる様子もなく立っていた。ドレナン夫人は、ただ単に恐れていないというだけではなかった。抵抗するつもりだった。彼女は柄の長い乾草刈り用の熊手で武装していた。彼女は、銃剣の付いたライフル銃を持って身構えている兵士のように熊手を持って威嚇した。

「ふたりとも手を上げろ。動くな！」ムーニハンは言った。

「手を上げろ！」デニスは言った。そして拳銃をドレナン夫人に向けた。

その年老いた女性はひるまなかった。

「人殺しの悪党めが！」彼女は叫んだ。「女を撃つつもりなの」

そう言って彼女は彼に突進し、熊手で突きつけた。デニスは2度後ずさりし、入口まで退却した。熊手の鋭くとがった先端の一片が彼の手をひっかけ、腕に達し、皮膚を切り裂いた。無意識のうちに、彼の手は拳銃を強くつかんだ。彼の人差し指が引き金を引いた。鋭い破裂音があった。熊手はドレナン夫人の手から落ちた。彼女は両腕を上げ、半分体をくねり、それから崩れ落ち、地面に倒れた。メアリー・ドレナンが飛び出してきて、母親の体の上につ伏せた。

部屋の中に死のような沈黙が訪れた。男たちは恐怖に打たれ、言葉を失い、何もなすべがなかった。彼らの目的は、いったい何だったのだ。自由のために戦うことだった！ アイルランド共和国を打ち立てることだった！ 自分たちが勇敢な愛国主義者であることを証明することだった！ こんなことが目的ではなかった。死んだ女は、彼らの目の前の床に横たわり、娘は彼女の上につ伏せていた。デニス・ライアンは、一瞬、感情をかき乱して立ちすくみ、拳銃を握った彼の手はだらりと垂れていた。それから彼はもう片方の手をゆっくりと上げ、自分の目の前に差し出した。

メアリー・ドレナンはうめき声を上げて泣いた。

「ここから立ち去った方がいい！」ムーニハンは言った。彼は低い口調で言った。彼の声は震えていた。

「おまえら、ここから立ち去れ！」彼は言った。「できるだけ早く家に帰れ。道ではなくて、草むらを突っ切って行け！」

男たちは家を抜け出した。デニスとムーニハン、それにメアリーと死んだ女だけがとり残された。ムーニハンはデニスの腕を取り、入口ま

で引きずって行った。デニスは彼を振り払った。彼はメアリーが地面にひざまずいている方を見た。彼は顔から覆面を引き剥がし、投げ捨てた。

「ああ、メアリー、メアリー！」彼は言った。「ぼくは決してこんなことするつもりじゃなかったんだ！」

娘は目を上げた。一瞬、彼女の目は彼の目と合った。それから彼女は再び母親の体の上につぶせた。ムーニハンは再びデニスをつかんだ。

「この馬鹿野郎！」彼は言った。「おまえは死刑になりたいのか！おまえは今夜やったことのために俺たち全員を死刑にしたいのか！」

ムーニハンはデニスを家から引きずり出した。彼は震える男の腰に腕を回して、町に通じる脇道に達するまで草むらの中を引っ張って行った。

.....

3日後、王立アイルランド警察のチャルマーズ警部と治安判事のホワイトレイ少佐が警察署の中で一緒に座っていた。

「連中を逮捕しました」チャルマーズは言った。「8人全員を逮捕しました。これであの忌まわしい秘密組織の残りの連中をすぐに逮捕することができます」

「証拠はあるのか」ホワイトレイは尋ねた。「誰が有罪なのか、証拠はあるのか」

「確たる証拠はありません」チャルマーズは言った。「あの娘があ連中だと証言するまでは。しかしあ連中が犯人であることは確かです」

「娘はあの連中が誰か特定できないはずだ」ホワイトレイは言った。「あの連中は覆面をかぶっていたに違いない。それにもしあ連中のうち誰かひとり特定できたとしても、娘は恐れて証言しないだろう。この国の現状からして、恐ろしくて正直に話す者は誰ひとりいないだろう」

「あの娘は何ひとつ恐れませんが」チャルマーズは言った。「私は、あの娘の父親を知っています。死んだ母親も知っています。娘も知って

います。ドレナン家には正直に話すことを恐れる者は誰ひとりおりません。私は、娘を連れてくるために巡査部長を派遣しました。娘は数分後にやって来るでしょう。その時には娘が臆病かどうか分かります」

10分後、メアリー・ドレナンは巡査部長によって部屋に案内された。彼女を待っていた2人の男は彼女を親切に迎えた。

「まあドレナンさん、座っておかになって下さい！」ホワイトレイ少佐は言った。「あなたにご面倒をかけて申し訳ありません。あなたにとっては痛ましい出来事について、あなたにお尋ねしなければならぬのは誠に気の毒です。しかし私は、あなたのお母さんが殺された夜に起こった出来事を、思い出せる限り、正確に話していただきたいのです」

メアリー・ドレナンは、顔面蒼白で、うちひしがれ、以前警察官にしたのと同じことを語った。彼女の父親は牛を市に連れて行って留守で、彼女と母親は夜遅くまで起きていて、11時頃一緒に寝たと語った。彼女は、どうやって6人の男たちが台所に押し入ったかを語る時でさえも、無感情に、声の抑揚もなく語った。

「男たちのうち誰かひとりでも特定できる者はいませんでしたか」

「いいえ。彼らは覆面をかぶっていましたし、干し草を服に巻き付けていましたから」

彼女は母親の抵抗と、取っ組み合いと、拳銃の発砲について語った。そこで彼女は突然話を止めた。その後で起きたことは、彼女は警察官には一言もしゃべっていなかったが、ホワイトレイ少佐は彼女に尋ねた。

「男たちのうち誰かが口を開きませんでしたか。彼らの声に聞き覚えはありませんでしたか」

「ひとりが話しました」彼女は言った。「しかし聞き覚えのない声でした」

「彼らの顔を、彼らのうち誰かの顔を見るチャンスはありませんでしたか」

「拳銃を撃った男が部屋を出る前に覆面を外して、私は彼の顔を見ました」

「そうですか！」ホワイトレイ少佐は言った。

「あなたはもう一度彼に会ったら、彼が誰だか分かりますか」

彼はその質問をする時、ぐっと身を乗り出した。

「はい」メアリーは言った。「私はもう一度彼に会ったら、彼が誰か分かるはずですよ」

ホワイトレイ少佐は、自分の隣に座っているチャルマーズ氏の方に体を傾けた。

「君が捕まえた男たちのうちに犯人がいれば」彼はささやいた。「娘の証言に基づいて絞首刑にしよう」

「私が捕らえた男たちのうちにきっと犯人がいます」チャルマーズは言った。

「ドレナンさん」ホワイトレイ少佐は言った。

「私はこの部屋に8人の男をひとりひとり入れます。そこであなたの母親を撃った男、部屋を出る前に覆面を外した男を特定していただけますか」

彼はテーブルに立っているベルを鳴らした。巡査部長はドアを開け、気をつけの姿勢で立った。チャルマーズ氏は命令を下した。

「捕らえた者たちをひとりずつこの部屋に入れるのだ」彼は言った。「そしてひとりずつそこに立たせるのだ」彼は窓の反対側のある場所を指さした。「明かりがはっきりと顔を照らすように」

チャルマーズ警部は犯人を逮捕したと言った時、むやみに自慢したわけではなかった。すべての国の警官と同じように、彼は予備知識に基づいてシンフェイン組織の主要メンバーを逮捕したのだった。彼らのうち2人については他の男たちよりも犯人の確率が高いと彼は信じていた。ムーニハンは組織の秘書で、もっとも影響力を持つメンバーだった。デニス・ライアンは殺人事件の夜以後、不治の病に冒された人間のような表情で街を徘徊していた。彼を職員として雇っている弁護士は、彼はまったく仕事ができないと不平をこぼしていた。警察は、彼かムーニハンが拳銃を撃ったと確信していた。彼ら2人とも、そしておそらくは彼らに近い10人以上の男たちが、どちらがやったか知っていると確信していた。

6人の男たちが次から次へと部屋に入れられた。メアリー・ドレンンはひとりひとり見て、首を横に振った。ムーニハンの順番が来た。彼は挑戦的な態度で入って来て、警官と治安判事を傲慢に睨みつけた。彼はメアリー・ドレンンを見た時、いかなる感情も示さなかった。彼女は彼女を見て、もう一度首を横に振った。

「違うか」チャルマーズは言った。「本当に違うか」

「違います」彼女は言った。「彼は私が顔を見た男とは違います」

「次の男を出せ」チャルマーズは言った。

ムーニハンは、向きを変えて巡査部長について出て行く前に直立不動の姿勢をした。そして手を挙げて敬礼をして彼の信念を公言した。

「反乱者よ、立ち上がれ！」彼は言った。「シンフェインよ、立ち上がれ！ 神よ、アイルランドを救い賜え！」

デニス・ライアンが連れて来られ、所定の位置に立たされた。彼は震えながら立っていた。彼の顔色は蒼白だった。手の指はびくびくと動いていた。頭は垂れていた。彼は一度だけ目を上げ、一瞬メアリーの顔を見た。口に出しては言えない何かを彼女に理解させるために、何かメッセージを彼女に伝えようとしているかのようだった。

彼女はじっと彼を見つめた。彼女の顔はもともと色白だった。この時、赤みがかかった色が彼女の頬を染めた。チャルマーズはぐっと身を乗り出し、彼女が話すかあるいは何らかの兆候を見せるのを待った。ホワイトレイ少佐は、神経質そうに彼の目の前のテーブルを指で叩いた。

「この男は違います」メアリー・ドレンンは言った。

「もう一度見るのだ」チャルマーズは言った。

「この男だろう」

彼女は彼の方を向き、落ち着いて静かに言った。

「違います。この男ではありません」

「なんということだ！」チャルマーズは言った。「結局、この娘は俺たちを見捨てた！ 巡査部長、この男をここから連れてゆけ！」

デニス・ライアンはメアリーが話す時、両手で顔を覆っていた。彼は向きを変えて巡査部長について部屋から出て行った。それは、惨めに、完全に恥に打ちのめされた男だった。

「待て！」チャルマーズは言った。彼は怒りを込めてメアリーの方を向いた。「おまえは誓うか。この男ではないと絶対誓うか」

「誓います」メアリーは言った。

「おまえは間違いなく嘘の証言をしている」チャルマーズは言った。「おまえは知っているはずだ」

ホワイトレイ少佐は冷静で丁重だった。

「ドレンンさん、ありがとうございました」彼は言った。「これ以上あなたにご迷惑はかけません」

メアリー・ドレンンは立ち上がり、2人の男にお辞儀をして部屋を立ち去った。

「チャルマーズ、この男たちを釈放しても良いだろう」ホワイトレイ少佐は静かに言った。

「彼らがやったという証拠はない。彼らを有罪にはできない」

「釈放します」チャルマーズは言った。「しかし彼らがあそこにいた男たちです。そして最後のデニス・ライアンが拳銃を撃ったのです」

メアリー・ドレンンは2度と彼女の恋人に会わなかったが、彼がアイルランドを去る前に手紙を書いた。

「デニス、私がどれほどあなたを愛していたか分かったでしょう。私はあなたの命を救ってあげたのよ。私はあなたのためにあなたの命を買ってあげたのよ。そして私が嘘の証言をしてお母さんの霊を裏切った時、私は私の魂を売ったのよ。デニス、私はあなたをそこまで愛していたのよ。でもあなたとは2度と口を聞くつもりはないわ」

「命がけの愛」の意義と価値

バーミンガムは自叙伝『麗しき土地』(Pleasant Places, 1934)のうちで、カーナルウェイに住んでいた時の、シンフェインによるテロ活動の恐怖について述べている。

郵便局が襲撃され、電報を打つのに10キロ以上離れた郵便局に行かなければならなかった。道路には溝が掘られたり、木が倒されたりして通行不可能になった。自家用車は盗まれ、壊され、焼かれた。あらゆる郵便局にシンフェインの手先がいて、手紙を厳しく検閲した。イギリスにいる友人たちにアイルランドの現状を知らせる手紙を書こうものなら、その人物はアイルランドをすぐに去れという脅迫を受けた。ほとんどの家庭に雇われた使用人はスパイで、家の中の会話を密告した。バーミンガムがカーナルウェイを去ることを決意したのは、彼のお抱え運転手が巻き込まれた事件のためだった。彼はある時、24時間以内にアイルランドを去らなければ射殺するという脅迫状をシンフェインから受け取った。第一次世界大戦に参戦し、勇敢戦った経験を持つこのお抱え運転手は脅迫を無視したが、夜、物音がするたびにシンフェインが打ち殺しにやってくるのではないかという恐怖に襲われ、3週間後にはついにアイルランドを去った。

カーナルウェイにおけるバーミンガムの体験は、『公共のスクャンダル』(A Public Scandal, 1922) に収められたもうひとつの短篇小説「かわいいキティー」(“Pretty Kitty”)の中で描かれている。これは、テロ活動によって破壊された道路を、警察とシンフェインが協力して復旧し競馬レースの開催にこぎつけるというユーモア小説で、人間同士の融和のためには何事にもジョークを見出す必要があるというバーミンガムの信念が溢れ出た作品である。

これに対して「命がけの愛」はユニオニズムに加担する家族の娘と、ナショナリズムを支持しシンフェインに属する男性の恋愛とその破綻を描いた深刻な作品で、この両派の対立の根深さをえぐり出している。

バーミンガムはナショナリストとユニオニストの対立を生涯、目の当たりにし続けてきた。信仰心の深いキリスト教徒であった彼は、ユーモア小説を通して両派の融和を訴え続け、人間同士の融和には何事においてもジョークの精神が必要という普遍的真理を示した。その一方で

『煮えたぎる釜』(The Seething Pot, 1905) や『ハイヤシンス』(Hyacinth, 1906) や「命がけの愛」のような深刻な作品を通して、21世紀の今日も続くユニオニストとナショナリストの対立を露呈した。その意味では、バーミンガムのユーモア小説も深刻な小説も、同様に強い説得力を持ち、普遍的な意義と価値を備えているといえよう。

翻訳テキスト

George A. Birmingham, *Lady Bountiful* (London: Christophers, 1921)

バーミンガムの他の短篇小説集

The Adventures of Dr. Whitty (1913)
Minnie's Bishop (1915)
Our Casualty (1919)
A Public Scandal (1922)
Love or Money (1935)

本稿は科学研究費助成(基盤研究(C):課題番号22520288)に基づく研究成果の一部である。